震災から15年目の発信

三陸 椿 物語

誰一人取り残さない

岩手県大船渡市　株式会社バンザイファクトリー

陸前高田市の就労支援センター（障がい者施設）「作業所きらり」さんは、椿葉の生産に取り組んだ最初の事例となり、他の施設の視察場所にもなり活動が広がった

概要

3・11震災の津波に負けずにたくさんの椿が生き残っていたことを知り椿による産業化への道を模索した。自生椿が多いことと植林されて未活用になっている物が多い。その椿を採取して原材料にする生産作業を2024年5月現在で岩手・宮城沿岸地域の障がい者施設12ヶ所と連携、これ以外には個人の内職、生活困窮者、ひきこもり、さらにボランティアとして精神病院での作業療法、高齢者のデイケアに活用され（お礼として椿茶を渡している）、合わせて日々70名以上の体制を作り上げた。掲げた目標は「SDGs誰一人取り残さない」

震災で市の花、椿の生育に気づかされた

2011年3月11日、震災による大津波が襲来、陸前高田市では7万本の松があった名勝・高田松原海岸では一本だけが生き残った「奇跡の一本松」が復興のシンボルとなった。その陰で多く生き残っていたのが三陸椿だった。陸前高田市と大船渡市の「市花」は椿である。昔から親しまれていた椿が津波に負けずに多く生き残っていたことを不思議に思い、調べていくと椿は根を最も地中奥深く伸ばす性質の木だったと知った。その性質から生育は遅く、周りの木々の成長に追い越されて陰に隠れてしまうことから、ヤブ椿とも呼ばれていた。しかし生育に数倍から十数倍の年数がかかっても一旦深く根を張った椿は、災害に最も強い木になることを知った。逆に成長の早い木には弱いものも多いことも解った。

三陸椿物語

椿の生き様を見て、私たち人間も競争社会で生きてはいるが、早く成長することだけではなく、自分のスピードで人生の根をじっくりと深く伸ばし、やがて誰にでも訪れる人生の荒波に耐えて、自分らしい花を人生に咲かせたいものだと感じた。

プロダクツの研究開発に挑戦

こんな強く素晴らしい椿を原材料にした商

品を作れないかと考えた。調べたら椿はお茶の原種「ツバキ科ツバキ属チャノ木」であることが分かった。2012年当時は椿葉を大量に使ったお茶は存在していなかった。緑茶を中心として椿を10％程度混合して椿茶と命名した物や、紅椿茶と書かれた緑茶等が存在していた。「無いなら創る」の精神でこれはチャンスだと考え、新しい物を作る「震災3・11」「復興3・10」から「新興3・12」を繋げて本質的な復興を目指そうと取り組み、3年近い研究開発を費やして椿茶の製造販売にこぎ着けた。新東北みやげコンテスト「東北6県」では2位を2回、佳作を1回受賞する成果を得た。しかし現実は、お茶は衰退産業でありペットボトルに押されて急須で飲むようなお茶は伸びないと言われていたが、その情勢に挑戦し少しずつ販路を伸ばしていった。

重要な地域資源に気づかされ、さらに深く取り組んだ

椿は三陸海岸一帯（岩手県大船渡市「北限」から宮城県塩竈市の間）に大量に自生しており内陸にはほとんど自生していない。植林されて未活用の椿もあった。行政と震災復興支援で来訪した東京の大学との共同調査により、陸前高田市と大船渡市だけで約20万本近くの椿があることが確認された。また、宮城県側の気仙沼、石巻、松島、塩竈にも同等数の椿があることも予測された。椿は常緑種、この膨大な天然資源は日々の持続可能な仕事に持ち込めるのではないかと考えた。椿の葉を年1回の収穫物ではなく、季節変化への対応を行い、年間を通じた生産ができる仕組みとして製茶できる製造方法を完成させた。

最初の雇用は震災による被災者の方々だった

2015年当時は津波で自宅を流され仮設住宅に暮らす方々をパートタイムで雇用し、地域住民の協力により提供してもらった採取場所に行き、8人のスタッフと共に小枝ごと採取して来て、工場で椿葉だけにして洗浄と磨きを行い原材料にした。椿は独特で、葉の表面に蝋燭と同じ蝋成分があり、一般的な緑茶葉や同様の葉を洗浄する機械では除去できなかった。三陸の椿は蝋成分が厚かったからだ。品質を高めるために、葉の採取部位と保管方法、そして作業方法の改善と改良を重ね続けた。

三陸地域の自然環境とその恩恵を知る

2018年夏、関東からの造園業組合の来訪をきっかけに彼らから知らされた。「茶毒蛾を代表とする猛毒の害虫達」をどう回避しているのか？と質問が出たが、三陸海岸の冬は極寒のために、やっかいな虫たちは越冬できず生息していないので、我々はその害虫の存在を知るよしもなかった。施設では猛毒の害虫対策をせず安心して安全に採取できていたことは幸運だった。三陸地域の自然環境の恩恵は多大だと知った。また、一般的にお茶に使われている農薬はネオニコチノイド系の物も使われており、これは発達障害の原因だと欧米で研究され禁止や抑制がされているが、日本では広く使われていた。よって三陸地域で普通に作る椿茶は無農薬であり、その恩恵はグローバルな視点では優位だった。

さらに素晴らしい環境だと知る。リアス式海岸の特徴により特別な生育環境で葉が育っていることを、東京の有名ホテル「椿山荘」の支配人の意見により調査して確認することとなった。それは全国の産地の椿と比べると三陸椿の葉は、大きく、厚く、硬く、色が濃いと感じたとのことだった。それではと関東から九州まで足を運び確認したところ言われた通りであった。大学の専門家に知見を聞くと、リアス式海岸の塩害とやませの風土が育てているからだと予測された。椿自身は塩害から守るために葉を厚くして濃い色になっており虫除けにもなる。さらに「やませ」の影響で光合成を高めるために葉が大きくなっているの

ではないかとのことだった。これは独特な地域性で育つ地域資源を発見したことだと理解し、かつ、これが市花の椿だったのかと胸は熱く燃えた。

障がい者施設との生産連携が始まった

２０１８年秋になり、椿茶は土産物として岩手県内や仙台市の駅売店などで売れ始め、生産作業を拡大していたところ、陸前高田市での課題となっていた震災による「ひきこもり」の課題解決に取り組んでいる財団法人から、バンザイファクトリー社の工場でパートタイムの雇用者が従事している椿葉の洗浄と磨き作業を私たちにもさせてくれないか？と相談を受けた。では1kg当たり２０００円で買取にしてやって見ようと試験的に始めた。最初は自宅でやっていた方々が、集会所でもやるので出てこないか？と誘ったところ、数人が続けて自宅から出て来て、ひきこもりの解決に一役買ったとの嬉しい報告を受けた。これが２０１９年に地元新聞で４回大きく連載の記事になった。新聞を見た地元の就労支援施設（基本的には知的障がい者施設）が、私たちでもできないだろうかと相談が来た。やってみようと生産作業マニュアルを作り、葉の採取から、作業所内での伐採した椿の維持管理など、効率良い作業を模索していった。

施設での作業分担における慢性的な課題を解決

施設では、障がいの軽い人には作業が集まり、障がいの重い人には作業がない（少ない）、この慢性的な状況が課題だった。椿葉の生産作業では、障がいの軽い人と作業所スタッフが椿の伐採に出かけ採取して来る。作業所内ではさらに次に障がいの軽い人が細かく枝落としをする、葉だけにする、障がいの重い人は葉を洗浄・磨きをする（ここは基本皆でも行う）、最後に作業所員が検品を行いバンザイファクトリーに出荷する。このようなシームレスに全体へ行き届く仕事は初めてだったと報告された。また雨の日や冬場で外仕事が厳しい時には、屋内でできる仕事として助かるとのこと。そして買取価格は一般的な農作物の数倍になり、これも嬉しいとの評価をもらった。また一生懸命集中して葉を磨く利用者の性質は重要な利点だった。

健常者の課題として、ついつい話に夢中になったり、手が止まることや、時間が迫れば急いで適当になったりすることがあった。施設と連携することによって驚くほどに葉の品質が上がり、椿茶は美味しくなったとの評判が上がった。原材料が良くなれば製品が良くなるのは当然のことだった。障がい者だから品質が悪い等は全く当てはまらず、むしろ逆だった。ホテル椿山荘東京に採用されＯＥＭで椿山荘のラベルになった商品になり、品質の高さはお墨付きを得た。その決定打の一つは「無農薬」でもあった。

コロナ禍での工場製造機械の充実と生産体制づくり

２０２０年に入りコロナ禍になった。椿茶は土産物なので大苦戦となった。しかし、意を決して投資を行い工場の設備を充実させた。さらにコロナ明けの先を見据えて生産体制の強化を狙い、岩手県と宮城県の三陸沿岸地域の就労支援施設に事業を紹介した。コロナでお互いに仕事の厳しい時に体制づくりの準備をしようと試みた。結果、取り組みしたいと次々と意向を受け、２０２４年５月現在では、三陸地域（岩手と宮城）で12箇所の施設と連携（連携財団先を通じた施設も入れて）できた。およそ延べ70人以上が毎日、椿の仕事をするようになった。今後は３桁以上になることを目指している。

ほとんど作業がない全盲の障がい者も取り組めた

宮城県では全盲の方がリーダーとなって椿の仕事を始めた施設が出た。全盲になるほと

んどの方々は、生まれながらではなく、成人してから病気・怪我等が原因で全盲になっていることを知らされた。全盲の方はこれまでの仕事として、組み立てや袋詰めなどであったが、斜めに入ったり逆さまになることもあり、なかなかスムーズにいっていなかった。しかし椿に関しては「葉」であり、目が見えていた時に良く理解している物であり、手で触れば形も状態もある程度認識できるので見えなくても作業可能となった。色が悪い物や形の悪い物、傷んでいる物は目が見える人が除外して、ある程度状態の良い物を全盲の方に担当してもらい、洗浄と磨き作業を担ってもらうことにした。リーダーの全盲の方から「椿をきっかけにみんなが一丸となって仕事ができました」と笑顔で報告された時には流石に感動した。

各テーブルに作業ガイドが書かれている様子
（宮城県気仙沼市）

地域の物で地域を良くする・誰一人取り残さないＳＤＧｓ

大船渡市と陸前高田市では、生活困窮者、デイケアで集まる高齢者、さらに精神科病院では患者の安定のためこの椿作業を作業療法士が取り入れた。このように裾野の広い生産作業となり拡大を続けている。高齢者は社会との接点が切れたくないという気持ちも強く、この椿作業で商品製造の一翼を担っている達成感を感じているとの報告もあった。また、このソーシャルな取り組みをホテル旅館、飲食店、バーでの椿茶割などでメニュー化している所では、お客様にこの生産活動を伝えているとの報告もされ、首都圏の高級飲食店にも採用されている。このような産業形態は資源のある地方ならではの取り組みであり、また誰でもできる生産に持ち込むことで持続性も高まると考える。

しかしながら本質的な柱は、それぞれの生産者に対して「下請け」「外注先」「仕入れ先」という気持ちではなく、伴走している両輪の「取組先」であると表明して口にも出し続けてきたことが、お互いの精神的な繋がり、安心、温かい、協力し合える土台の元となる思想にあったと考えられる。地方が衰退する原因の一つは仕事がないこと。都会でもできる、何処でもできる仕事では過当競争に巻き込まれる可能性が高い。いずれ安い賃金で大量に生産・製造できる所や国に負けていく。やはり「ここでしかできない」ことが持続的な地方の維持、成長に繋がる可能性があるのではないかと、この体験を通じて感じている。

施設における作業者の様子（岩手県陸前高田市）

レッドカーペット・プロジェクトの推進

㈱バンザイファクトリーで２０１５年から取り組んでいた、震災津波により被災し未活用となった土地に椿を植える活動、レッドカーペット・プロジェクトを２０２０年６月に一般社団法人に登記した。椿茶や市内で椿

を使った商品から3％がこの法人に寄付される仕組みにした。被災土地に椿を植え「緑地化」する活動を活発化した。自動車ディーラーや国内最大の組合組織、酒造・飲料メーカー、ライオンズ、神社仏閣、企業や個人も寄付をしてくれて、椿を植樹して育てている。いずれ産業の下支えとなる椿の原材料供給や、椿プロダクツを開発したい三陸地域の業者の支援をしたいと考えており、椿茶を土台として啓蒙をしている。2022年に陸前高田市にある菓子メーカーが椿茶で仕込んだ菓子が大手自動車メーカーに採用された。10万個を出荷し一千万円近い売上を上げた。その実績から30万円以上の寄付が寄せられた。また椿林檎ジュースを商品化したワイナリーや椿髪油と名付けて化粧品を商品化した地元美容室も出てきた。

椿学習の実施による地域への誇り、自身への誇りを持たせる活動

震災後に全くのゼロから仕事を作り出し、さらに成長させ、産業化を目指していることと、健常者も障がい者も高齢者も境目なく椿の仕事をしているSDGsのテーマ「誰一人取り残さない」の実態を、地元学校教育関係者が知り、その要望から「椿学習」と呼ばれるキャリア学習を開発し、授業に取り入れられた。小学校、中学校において2018年からボランティアで実施した。地元で延べ3000人以上の学生に実施してきた。中にはこれがキッカケで進学を強めた学生が何人もいた。教育機関にはとても喜ばれた。しかしボランティアによる活動は限界があり、一般社団法人としての活動にして続けられるようになった。

椿による地域活性化と産業創出、その実績を子どもたちに知らせて、卒業の記念植樹会にも発展させた。椿の花言葉である「誇り」を取り戻させようとしてきた。学校から届けられた「感想文」は数千になり、2024年2月には、気仙地域（陸前高田市・大船渡市・住田町）の小学校・中学校の校長から構成される「気仙校長会」からの依頼によりこの活動実績の報告講演を行った。このように一定の評価を得て現在も椿学習を行っている。

陸前高田市立高田東中学校3年生の卒業記念植樹会の様子

地元全中学校の椿学習と卒業記念植樹は4年目になり、卒業してからも震災を生き残った椿の生き様を、自分に重ね、少し遅れている、負けている、評価されない、と思っても、我慢して椿のようにじっくりと時間をかけて人生の根を生やす、花言葉である「誇り」を自分自身も持って生きてください、椿は日本が原産国、まさに日本人の目指す生き様かもしれないと教育による啓蒙活動を続けている。この経済活動、生産活動（被災土地課題）、教育活動は今年で9年目に突入している。以上が今日までの活動報告です。

椿学習の様子（陸前高田市立高田小学校）

（株式会社バンザイファクトリー
代表取締役　高橋和良）